完全シーズ思考の開発部門立ち上げ

小回り利かせたイージーオーダー品

NKE 代表取締役社長 中村 道一 氏

なかむら・みちかず 1964年京都市生まれ。近畿大学機械工学科卒業。創業者の父・圭二会長の後を継ぎ社長に。「機械工学をやりましたが、根っからの機械屋というわけではありません。父の姿を見て自然と経営の道を志すようになりました」。趣味は読書や音楽鑑賞、ゴルフ。

一昨年に創業50周年を迎えたNKE。コンベア、段積み・段ばらしユニットなどの搬送機器を中心に、パーツハンドリング機器やネットワーク機器などを製造し、全体最適のモノづくりを提案する。

――昨年、事業単位の組織を製造や営業などの機能別に再編し、開発部は社長直轄とされました。

「2018年に50周年を迎え、本社棟を建てました（19年1月竣工）。これまでは事業ごとの採算性を意識してきましたが、このタイミングで組織を再編・集約し、イノベーションを起こしていけるような相乗効果を狙っています。これまで離れた場所にいた社員同士の会話が活発になり、部門横断的なプロジェクトもいくつか始動しました。実需部隊から切り離して20人弱の開発エンジニアを配置したのも特徴です。ここで機械・電子・デザイン・知財・AI関係などを担当します」

――ニーズ型でなくシーズ型で開発されると。

「完全にシーズです。世の中にないおもしろいものを生み出そうと」

――しかも開発部は社長直轄。力が入っています。

「思いは入っています。私が直接指示を出すということではなく、一人ひとりがもつインスピレーションをすべて拾い上げて、それを実現可能なアイデアにして、機械や電子、デザインの担当者が素早く形にします。このスピード感は私たちにしかできない。お客様の声を聞くことはもちろん大事なのですが、それを聞いたうえで自分たちのオリジナリティーも出していかねばなりません」

――マテハン関連の受注環境はいかがですか。

「去年、一昨年はよかったのですが、去年の暮れくらいからブレーキがかかっています。19年度の売上高はいまのところ前年度比95%。自動化、省人化といったテーマはますます重要度を増していますから、そこにフィットした商品を提供できれば売上はまだ伸ばしていけるはずです」

――貴社は搬送機器単体だけでなく、BBS（Block Building System）と呼ぶユニットの組み合わせによる自動化を提案されています。

「BBSが生まれたきっかけは、自動機の設計です。自動機は一品一様で都度設計するため手がかかります。前もって準備しておけることはないかと考えた際に、複雑に見える動きのなかにも共通したパターンがありそれを先に抜き出して安定したブロック状にすれば後々組み合わせやすい。ただ、標準品にすると数の論理で大企業の製品に価格勝負できません。当社は標準品をベースにカスタマイズできます。イージーオーダーのような感じで、小回りが利くのがウリです」

昨年商品化した人工筋肉搭載の腰サポーター「腰助くん」。小型ポンプで空気圧を調節できる

――主力の搬送機器にどんな特長をもたせていますか。

「コンベアを中心とする搬送機器が売上高の7割近くを占めます。当社は標準的なコンベアをつくろうと思って製品化したわけではなく、イージーオーダーにつなげていきたい。当社はエンジニアリングコンベアといった呼び方をしていて、システム構築する際に特殊化されたユニットとユニットをうまくつないでどのように工程のフローを整流化すれば全体のスループットを上げられるか、という発想の製品です」

――今後力を入れたいことは。

「FAど真ん中の商品のほか、新規事業として一般の生活者の役に立つ自動化機器も開発したいです。通信のノウハウを生かしたお年寄りの見守り機器や空気圧を利用したコルセットは昨年商品化しました。後者は手のひらサイズのポンプの空気圧で収縮する人工筋肉で腰をサポートします。ゆくゆくは全身のアシストスーツもつくりたいですね」